

Fun Diving

海が友達になる

What's OPEN WATER?

—オープン・ウォーターって何?— Vol.2

学科、実技でダイビングに関する基礎知識をマスターすれば、水深18mまで監督条件解除で潜れるライセンス。ダイビングの入口だ。

そのオープン・ウォーターについて、CF17月号・8月号で大解剖。今回はその2回目

STEP1 学科講習

まずはテキストとビデオを使ってバーチャルに頭の中でダイビングをしてみよう。好きな時間に自宅でダイビングの知識を身につけたら、次はショップに向いてテストを受けて。

STEP2 プール実習

頭で分かっている、いきなり海に出るのはやはりコワイ。マスクに水が入った時の対処法、浮力の調節の仕方など安全なプールの中で一つ一つ実践すれば、本番でも心強いね。

STEP3 海洋実習

生まれて初めての海中散歩へ出掛けよう

さあ、いよいよ海へGO! 越前や和歌山など近場の海へ1泊2日のダイブ旅行。プールでの実習をよ〜く思い出しながら、楽しむことに集中しよう。潮の流れに驚いたり、可愛い魚に出会ったり。時間が経つのはアツという間。



2001年・PADIイメージキャラクター/広末涼子

楽しさ盛り沢山! 水中世界へのパスポート



海洋実習をマスターすれば、あなたの手元へ届くのがこのCカード。これが世界的なダイビング教育機関PADIが発行するオープンウォーター取得者の証。水中撮影やナイトダイブなどここから広がるダイブの魅力は無限大。

OWを取得したら、次はアドベンチャー・ダイバー、アドバンスド・オープンウォーター・ダイバーに挑戦。魚の見分け方やドリフトなど20以上のスペシャルティから好みのものをチョイスして、楽しみながら取得できるよ。

◆オープニング・キャンペーン◆

「オープンウォーターコース(コース費用55,000円)」をお申込みの先着30名様にマスク、スノーケル、グローブ、ブーツ、メッシュバック(32,000円相当)の5点をまとめてプレゼント! さらに「CFを見た」の一声で水中写真を進呈



www.i-dive.co.jp

京都市右京区西院巽町14-16

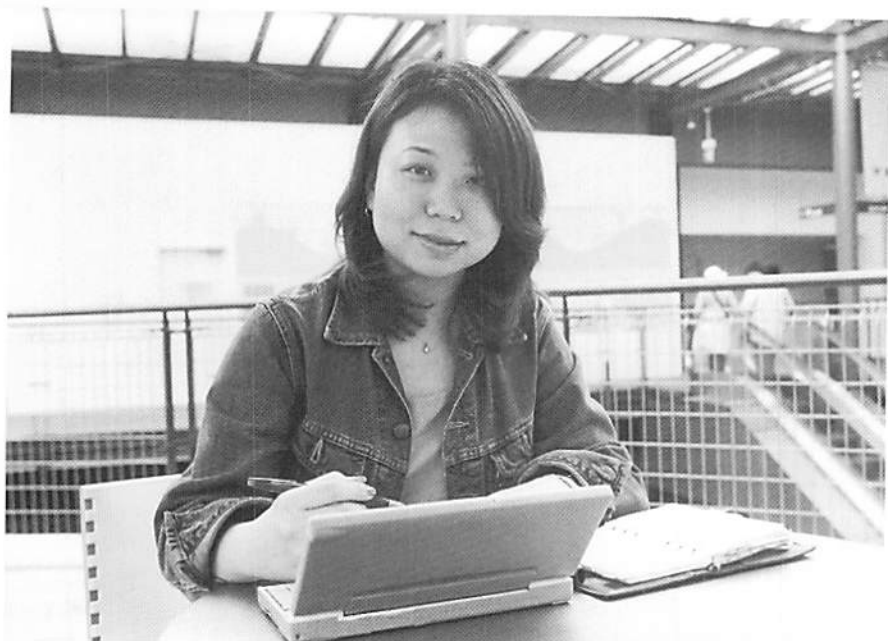
TEL.075・325・3573

営業時間 12:00~21:00

火休(6月~9月は無休)

URL <http://www.i-dive.co.jp>

E-mail info@i-dive.co.jp



作家

吉田里砂

Y o s h i d a R i s a

KYOTIAN I.D.

キョーティアンアイディ

1971年、京都市生まれ。京都ノートルダム女子大学文学部英語英文学科を卒業後、1年間会社員を勤めて退職。幼稚園を卒業した頃から書道学び、現在も書道教室の師範をつとめる。雅号は月心。第一作である「戒指(ガイチャー)」の題字も彼女の自筆。2000年記念、また20歳代最後の記念として出版を決意。趣味は読書よりも映画鑑賞と言うだけあり、その作風は細かい情景描写によるヴィジュアル的効果が高い評価を得ている。現在も香港には年に数回のペースで訪れており、いつか住みたいという思いは強い。

明日死ぬかも知れないから今日の自分を書き残したい



香港マフィアの人間関係や心の葛藤をスタイリッシュに描いた作風は現代アジア映画の香り



文字はメディアの中で、最も色気のあるものと吉田さんは考える



'97年の返還後、香港が少し小キレイになったように、それが寂しくもあるという

Information

「戒指~ガイチャー~」

四六判・上製・240頁・定価1400円税別
2000年12月1日文芸社より出版

「小説を出版したら知らない人にも自分の裸をさらけ出すような気がして、本当は迷ったんですけどね」。学生時代から、何らかの形で社会に名前を残すことを夢見ていた。ただ手段を探しあぐねて「普通の生活」を送っていた吉田さんの目に入った、文芸社が京都で主催した公募出版相談会の告知。「自分が何よりも好きな香港のことを、もともと得意だった『書くこと』で表現できたら。これが、自分の生きた証拠を残す唯一のチャンスかも、って思い切ったんです」。

ネオンの中へ墜落していくような香港旧空港に、彼女が初めて降り立ったのは15歳の時。喧騒、匂い、新興と老朽、息を呑むほど美しい夜景の街は、幼い心にその後一生の爪跡を刻んだ。「その後どんな国へ行ってもあれほどの感動は得られませんでした。そして大人になってからも、何度行っても香港では何かしらショックを受け、パワーが出てくるんです」。そのアドレナリンの理由を、彼女は香港全体にみながる生命力だと分析する。「日本ってスタイルが画一的でしょ?例えばファッションでも細くないと似合わない服しかないし、太ってるのがダメみたいに言われるけど、私は太くても健康やねんからええやん!って思ったり(笑)。それが香港では、美人のお姉さんも小汚いおじさんも、みんな自分の生き様を持ってる。たとえ道端でコピーブランドを売っている人だって、みんなそれぞれの人生を自分の視点でプライドを持って生きている。その能動的な生命力に、私はいつでも痺れさせられるんです」。疲れたり行き詰まったりすると必ず香港に行こうと思う、と言う彼女。香港は、彼女が生きていることを考える為には不可欠なモチーフでありまた舞台なのだと言う。

かくて吉田さんは精一杯に生きようとする香港の人々を描く。「彼女自身が生きた証拠を残す為」に綴る小説は必然的にと言うべきか、「生」を探るテーマを「死」というモチーフによって紐解くものになる。登場人物はときに驚くほど簡単に、犬死に・殉死・暗殺と次々に殺されていく。「幸せの絶頂での死とか、「何故この人が死ぬの?」と思わせるような死とか、いろんな死に方を提示することで、じゃあ生きて何なんだってことを考えたいし、考えてもらえれば嬉しい。これからも私は大勢の人を殺していきましょうね(笑)」。作家として今後も求めつづけたテーマ「生と死」が、世界中で一番密着してエネルギーを放つ街が香港なのだ語る彼女の第2作、舞台はやはり香港だそう。